

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Zu "Linkskurve", dem Organ des Bundes der
Proletarish-Revolutionaren Schriftsteller

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1974-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 正巳, Ogawa, M. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2175

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ドイツ・プロレタリア革命作家同盟 機関誌『リンクスクルヴェ』(1929年8月— 1932年12月)をめぐって

小川正巳

G. マルチネはこう言っている、「すべての共産主義諸国がいま経験している経済・社会・政治体制が、最終的にその形をととのえるのは、実は、1930年初期のことであった。ソ連における《戦時共産主義》(1918—20年)や《新経済政策》(1921—29年)は、過渡の段階にすぎないし、序曲でしかなかった。」⁽¹⁾1930年初期をかれはさらに詳しく1928年から1932年の「スターリンの大転換」⁽²⁾としている。さらにかれはこの「ソ連に樹立された体制はほぼ普遍的な影響力をもつ体制であることがわかったのは、第二次大戦がおわってからのことである」⁽³⁾と言っている。マルチネはその著作において、このソ連モデルと四つの大きな《変種》を〈構造的〉に展開している。

文学(芸術)に関しても、《変種》は別としても、ほぼそれに似たことが言えよう。ペーター・デメツツは『マルクス、エンゲルスと文学者たち』において社会主義文学の謂わば前史として、マルクス、エンゲルスの文学(芸術)観の検討から始めて、それ以後の流れを追いながら、マルチネの表現に相当するところを次のように粗描している。「(1919年に設立された)第三インターと、目的は一つにしながら、それに所属する諸組織が交替する時代は共産主義的文学批評の諸要求と読者の趣味とを、ソ連の国家的利害に従わせ

(1) G, マルチネ, 熊田享訳『五つの共産主義(上)』, 岩波新書 832, 3—4頁

(2) 同書, 88頁

(3) 同書, 5頁

る。最初の15年間は、作家及び独自に思考する批評家には、相対的な活動の可能性はあった。テロの影のなかで、暫時、独特の浮遊状態が発展した。そのなかでは、例えばロシア・フォルマリズムのような原理的に反マルクス主義的文学理論も発言した。30年の初期のスターリン権力確立とともに、やっとこのような独特な、精神的業績に異常に豊かな浮遊状態に終止符がうたれた、すなわち、唯一の理論的処方（その適用は結局、政治警察が決定したのだが）が読者、批評家、大学に対して拘束力をもった。この陰惨な時代の疑いもなく最も興味ある人物はジョルジ・ルカーチである。かれはスターリンが支配している間、古典的リアリズムについてのかれの個人的原理を、行政の要請に従わすことができた、ルカーチの弁証法的反対はしばしば行政への奉仕と区別されえなかった。この時代の第一の特徴は弾力的専門家性であった。すなわちメーリングとプレハノフは政治と文学におけるかれら独自の理念を党の行政機関に反して守ることができたのに対して、批評家は今や多くの国において、文化政策的行政決定の熱心な註釈者に墮した。スターリンの死（1953年）及び、それにつづくポーランドやハンガリーの反乱の時代に政治的文化的中央集権は利害の多極化に席をゆずった。そして、この多極化は批評家と作家に、地方的政治の交替において、新しい仕事の場と制限された発展可能性を与えている。スターリニズム時代の役人たちは、まだ不毛な社会主義リアリズムという公式に、しがみついている。行政機構の重要な要職を占めているかれらは、しかし絶えず、くりかえされる『改良主義者』たちの攻撃にさらされている。抵抗は就中二つの集団からやってくる。すなわち、まだスターリンの権力確立以前の思い出をもっている、インテリゲンチヤのより古い世代と、スターリニズムのテロをもはやその身に体験していないで、電子工業の時代にリアリズム芸術作品を要求することを正当にも、アナクロニズムと非難するより新しい、あるいは最も新しい世代がそれだ……」

(4) Peter Demetz: Marx, Engels and die Dichter, Ein Kapitel deutscher Literaturgeschichte. Verlag Ullstein. Frankfurt/M-Berlin 1969. S. 176f.

マルチネは共産主義体制が「最終的」形をとるのを30年代初期においたが、文学的「最終的」形をとるのもデメツツが指摘するようにほぼ一致するわけである。マルチネは、その最終的な形をとるのをさらに詳しく、1928年から1932年の「スターリンの大転換」においているが、文学の方で言えば、それは1934年7月8日の第一回ソ連作家同盟大会（ジェダーノフによって提唱された社会主義リアリズム）を最終的と言えよう。従ってこの文章で取りあつかうドイツのプロレタリア革命作家同盟の機関誌『リンクスクルヴェ』⁽⁵⁾は1929年8月に発刊され、1932年11・12月合併号で廃刊せざるをえなかったのであるから、1934年7月の第一回ソ連作家同盟会議における最終決定以前に姿を消したわけである。しかしマルチネは、その最終決定を1928年から1932年の「スターリンの大転換」においているのであるから、そしてそのような、重要な変化が文学の世界に影響を及ぼさないはずはないのであるから、その頃、ソ連と最も深い関係にあったドイツ共産党の指導下にあったプロレタリア革命作家同盟の機関誌にその転換のきざしを探ぐることができる。すなわちそれは、1930年11月にウクライナのハリコフで行われた第二回世界革命作家大会（ハリコフ会議）である。ハリコフ会議に関しては、事実『リンクスクルヴェ』は1930年の9月号に、ハリコフ会議で書記局の活動報告をした、ベーラ・イレーシが『国際作家プレナムを前にして』を書き、同年10月号には、本会議で「戦争の脅威と革命作家の任務」という報告をしている。ヨハネス・R・ベッヒャーが『革命文学の第二回世界会議を前にして』を同年10月初めの日附けでハリコフから送っている。さらに同年12月号にはベッヒャーによって『新なる課題を前にして』という題で、ハリコフ会議の報告が述べられている。さらに1931年2月号には「ハリコフ会議の収支決算」という副題で『プロレタリア文学の突破』が巻頭に出ている。そして、その号の巻末にプロレタリア革命作家同盟の名で『ハリコフにおける決議と選挙』が収録されている。決議はドイツ問題に関するものに限っている。おくれて1931

(5) 復刻版、(Verlag Devler Auvermann KG, Glashütten in Taunus 1970) を使用した。

年10月号にベッヒャーの『われわれの転換——プロレタリア革命文学の存在の闘争から拡大への闘争へ』という文章が、謂わばハリコフ会議の総決算の形で発表されている。総決算という意味で、その大意を述べれば、ドイツ・プロレタリア革命文学は短期間に大きな業績をあげた。しかし、それも革命の発展から見たら遅れている。すなわち大衆の運動のもりあがりに対して充分こたえていない。この大衆の要求に応じられなければ、大衆はプロレタリア革命文学以外で、その飢えをみたさざるをえない。

ソ連本国においては1930年11月のハリコフ会議から、最終的な1934年7月の第一回ソ連作家同盟会議までには、さらにもう一波乱があった。すなわちハリコフ会議で確認された唯物弁証法的方法は、会議の主役ラップ（ロシア・プロレタリア作家協会）とともに、上述のソ連作家同盟及び社会主義リアリズムという方法論に最終的にとって代られる。1953年にA. アナスタシエフは『形式主義と闘うモスクワ芸術座』のなかで次のように言っている、「ラップは1922—25年の間に発生し、ソヴェト文学の基本原則の確立、文学内部の反革命にたいする闘争、ブルジョア形式主義・唯美的傾向・左翼ニヒリズム・反動的コスモポリチズムにたいする闘争、などに貢献した優秀なソヴェト作家たちを結合しました。しかし、協会の指導部にもぐりこんだトロッキストたちは、全文学、芸術を自己の影響下にひき入れ、才能ある芸術家たちを独立させ、プロレタリア・イデオロギーのための、闘争という美名にかくれて、反党・反ソヴェト活動を行ったのです。ラップのトロッキスト指導者たちは、ソヴェトの政治体制をいやしめ、ソヴェト人民を中傷し、自己と党と対立させ、ソ同盟における社会主義建設は不可能である、社会主義文化の創造は不可能であるなどと、トロッキストの見解をふりまわし、アヴェルバハとその一味は、〈味方か敵か〉という有害なスローガンを持ち出し、社会主義文化の建設に参加しようとする進歩的芸術家インテリゲンチヤを阻止したのでした。」⁽⁶⁾ハリコフ会議で報告『われわれの政治的綱領』を行ったア

(6) アナスタシエフ、泉三太郎訳『社会主義リアリズムの方法と歴史』未来社、1954年、14—15頁

ヴェルバッハは、アナスタエフのこの本においては、終始諸悪の根元として名指されているが、1932年4月にアヴェルバッハなどの依るラップが、解散されたにもかかわらず、『リンクスクルヴェ』では1932年4月号においても、『われわれの文学は成長している』という報告文に理論書としては、アヴェルバッハの諸論文が推賞されている。私たちは1932年12月に廃刊せざるをえなかった『リンクスクルヴェ』においては、ソ連における最終決定を見ることはできないが、ハリコフ会議からそこに到る変動は、ハリコフ会議の主役であったラップの解散（1931年4月23日）をみつかった同年8月号のアンドレ・ガボールの『ソ連における文学・芸術諸組織の改造』及び、最終号である11・12月合併号のハンス・ギェンターの『ソ連文学15年』に窺うことができる。二つの文章で窺うかぎりには、ラップはよくその任務を果たしたが、それは所謂一つの組織にすぎないのであるから、今や膨はいとおこってきているソ連全体の大衆の文学的要求を満たすには狭すぎる。大衆の要求が、謂わばラップを爆破したのだ。さらに長い諸組織の闘争のあとに築かれたラップは、プロレトクトを体質としていて、アナスタシェフの言っているように〈味方か敵か〉という不寛容さのために、才能ある作家を包容しきれないということである。ただしラップにおいて、問題となった不寛容さは、アナスタシェフが言うように、トロキズムに重点がおかれてはいなくて、同伴者作家の問題である。いずれにしても革命後、下から発生した文学的諸組織は、ラップに集約され、そのラップは党によって解散させられて、最終的には1934年7月に党に掌握されることになる。なおこの問題に関しては『リンクスクル

(7) 十月革命の時、中心的だった象徴主義（ブルソフ、アンドレイ・ペリイ）、それをマヤコフスキイに代表される（左翼）未来派が追う。同伴作家を集めたヴオロンスキーの『赤い處女地』。労働者を中心に『鍛冶場』（ベシメンスキー等）、それはさらにナップの萌芽としての『十月』、さらに同じ線上に『哨所に立ちて』、このナ・ポストゥによるプロレトクトの同伴者作家（ピリニヤーク、アレクセイ・トルストイ、エーレンブルク等）への疑念。1924年5月9日の党中央委員会による各派集っての最初の討議「ロシア共産党の文学政策討議会」。反革命の抑圧、同伴者の教育、農民文学の指導、プロレタリア社会主義文学発展のための多面的育生等、以後の基礎となる。次いでラップの指導権、イデオロギーの勝利……

ヴェ』に集ったドイツ・プロレタリア革命作家の一部が、主要な亡命地モスクワで、かれらの文学運動をいかに続けたかを、かれらがモスクワで発行した雑誌『ダス・ヴォルト』(1936—1939)に見ることができるし、さらにそれは、戦後ドイツ民主共和国にある意味で継承されていると言えよう。

『リンクスクルヴェ』の背景をなすドイツ共産党は、最初は少数派とはいえ、第一次大戦とともに、社会民主党(第二インター)に対する幻想を、レーニンとともに断ち切ったと言えよう。すなわち、カール・リープクネヒトが社会民主党の党議に反して、戦事公債に否を投じたこと、やがてリープクネヒトを中心に社会民主党のなかに、独立社会民主党ができたこと、第一次大戦が終ると出獄したローザ・ルクセンブルクとともに、スパルタクス・ブントをつくったこと、そして、それがそのままドイツ共産党になったこと。ここにドイツ共産党の生れながらにして持っている左派的ラディカリズムを見ることができる。しかし1919年10月、議会内、組合内で革命をすべきだという主流派の反主流派の除名が行われた(党員の過半数は除名者とともに共産主義労働者党K A P Dをつくる)。さらに1920年12月には、社会民主党から分離した独立社会民主党左派と大同団結して、ドイツ統一共産党V K P Dとなる。1921年には中部ドイツの三月行動、その失敗の責任をおわされたパウエル・レヴィ、ドイミッヒらは除名され、共産主義研究会K A Gをつくる。1923年10月のザクセン、テュービンゲンの不発の武装蜂起を最後として、「⁽⁸⁾相対的安定期」に入る。だがこの相対的安定期(1924—1928)は、ソ連におけるレーニンの後継者をめぐる闘争を反映して、ドイツ共産党内においても左右にゆれ動いたが、1925年10月31日—11月1日のベルリンでの第10回党大会において、テールマンが党委員長となり、党内の論争終結が声明され、テールマン指導部が確立する。1926年8月に、左派のルート・フィッシャー、マズロウ除名、1927年12月には右派のブランドラー、タールハイマー等が除名

(8) 野村修編『ドイツ革命』、ドキュメント現代史2、平凡社、昭和47年、参照。

(9) される。林健太郎はその間の事情をこう書いている、「共産党は1923年の失敗の責を問われて、ブランドラーが失脚したのち、ルート・フィッシャー、マズロウ、テールマンらが指導権を握ったが、やがてフィッシャーとマズロウはモスクワの随使に反抗して党をおわれ、テールマンが党首になった。かれはハンブルク出身の労働者で、その素朴な性向によって大衆のあいだに人気はあったが、理論的能力も格別の識見もなく、ただモスクワの使令に盲従する人物であったため、以後長く党首の地位に留まることができたのである。⁽¹⁰⁾」いずれにしても『リンクスクルヴェ』の背景をなしていたドイツ共産党はテールマンに代表されていたことは事実である。それは例えば1932年の大統領選挙に対して、同年3月号における、ヒンデンブルクに対するテールマン・キャンペーンにも見ることができる。

「モスクワの使令に盲従(?)」していたドイツ共産党の背景をなしていたソ連、特にコミンテルンに関しては、右翼反対派が敗北した1928年の7—9月のコミンテルン第6回大会の「第三期論」、それにつづく翌年の7月のコミンテルン第10回プレナムにおける「社会ファシズム論」(社会民主党をファシズムと見なす)が、『リンクスクルヴェ』を終始支配していた。「第三期論」は相対的安定期の終りを告げるものであるとともに、それは1929年10月のニューヨーク、ウォール街の株式大暴落に発する世界大恐慌の謂わば宣言実現でもあった。敗戦国ドイツでは、大恐慌は次第にその悲惨を深めてゆく様は『リンクスクルヴェ』にも勿論反映されている。1929年6月のヤング案調印、1930年6月の「フーバー・モラトリウム」。「社会ファシズム論」は「第三期論」と結びついて、社会民主党SPDに対する攻撃を、フーゲンベルク、ヒットラーのファシズムに対する攻撃にもまして、終始一貫させている。SPDへの憎しみの対象として、かつて1919年ベルリンの一月闘争の弾圧者

(9) フレヒトハイム、足利末男訳『ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党』、東邦出版社、1971年。参照。

(10) 『ワイマル共和国』中公新書27、169頁。

ノスケに代って、『リンクスクルヴェ』ではSPDの牙城であったプロイセンの首相オットー・ブラウンの内相を久しく引きうけていたゼーフェリング(1928年5月から1930年3月までの最後のSPD内閣ヘルマン・ミュラー首相のもとで、内相をつとめるという中断はあったが)と、1929年ベルリンのメーデーに集った労働者に血の弾圧を加えたプロイセンの警視總監ツェアギーベル、ブリューニング内閣によって発せられた緊急条令の忠実な履行者であった次の警視總監クシェジンスキーであった。⁽¹¹⁾

私たちは『リンクスクルヴェ』の1930年9月号の巻頭のインテリゲンチヤに対する呼びかけの文章(同年9月の国会選挙へのアピールを含む)につづく、インテリゲンチヤに対する6つのアンケートに、当時の問題を端的に見ることができる。⁽¹²⁾(なおそのアンケートに続いて、アンケートに対する9名の解答と、解答に対する編集部批判が出ている)。

1. ほとんどすべての国、特にドイツの経済生活を揺り動かしている恐慌は、あなたの意見ではどのように排除されますか。
2. あなたはゼーフェリングの共和国保護法、ブラウンの官吏指令、すなわちいかなる集会をも恣意的な警官の検察下におく集会法の改正、映画検閲の強化、刑務所条項218等をドイツ文化の発展を促進するのに相応しい文化政策処置と見ますか。50人の共産党の編集者がドイツ共和国

(11) 林健太郎はクシェジンスキーを「右翼団体の取締り」の勵行者としてのみ挙げているが、『リンクスクルヴェ』の特に後半はKPD関係の「表現」への弾圧に対する抗議が激増している。(作家、編集者の実刑、作品の発売禁止、押収、文学集会の禁止等)。1931年12月号は、『リンクスクルヴェ』の攻撃の一つの対象であった平和主義の機関誌『ヴェルト・ビューネ』のカール・フォン・オシーツキー及びその協力者ヴァルター・クライザーにまで逮捕の手がのびていることが報ぜられている。

(12) 『リンクスクルヴェ』は後にもう一度アンケートを出しているが、アンケートは当時『リンクスクルヴェ』にとどまらず、1928年のフランスの『モンド』と協力して行った『ノイエ・ビューヒャーシャウ』の「芸術と労働者階級との関係」を問うたアンケート、1929年の『文学世界』の「プロレタリア芸術の可能性」を問うたアンケート、1930年の『モスクワ・ルントシャウ』の「社会主義的世界観に基いての新しい文学形成の可能性」を問うたアンケートについては“*Aktionen Bekenntnisse Perspektiven*”. (Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1766)の第2章「文学と労働者階級」に詳しい。

の牢獄や要塞監獄に入れられていることについてあなたはどうか考えますか、さらに1924年5月1日の社会民主党員ツェアギーベルの警察による35名の労働者の虐殺に対してあなたはいかなる態度をとりますか。

3. ドイツの労働者がファシズムの一撓に際して防衛するなら、あなたはどちらの側に立ちますか。
4. ソ連における五ヶ年計画の実現の展望をあなたはどのように判断しますか。失業がソ連では殆んど解消していることを、あなたは御存知ですか。あなたはソ連における文化の興隆の可能性をどのように判断しますか。
5. ソ連に対する資本主義諸国の来るべき戦争においてあなたはどちらの側に立ちますか。
6. あなたはドイツ社会民主党をまだ社会主義政党と思いますか。

ファシズムに対する統一戦線とは程遠いアンケートと言うべきだろう。『リンクスクルヴェ』には第一次五ヶ年計画（1928—1932）を実現しつつあるソ連への讃美と、反ソ文献に対する徹底的な反撃にみちている。大恐慌の悲惨のさなかにあったドイツ共産党にとっては、まさにその悲惨は、資本主義の完全な末路であり、その悲惨からの脱出は、共産主義以外には全くありえなかった。眼前にその実例としてソ連がある。対比は余りにも顕著であった。そしてそれは、このアンケートの5に集約されている。末期にある資本主義は、その資本主義の息の根をとめようとしている共産主義、その唯一の実現であるソ連にむかって、狂暴な牙をむきだして、圧殺しようとしている。この危機感から、ソ連防衛は『リンクスクルヴェ』のいくつかの基調の一つであり続けた。『リンクスクルヴェ』にはドイツについてプロレタリア文学の盛んな日本に関しては、文学の面では1930年4月号に森山啓の詩『松葉杖の男』、同年10月号に徳永直の『太陽のない街』の部分訳（全訳はやがて「赤色一マルク小説叢書」に出る）と藤森成吉の『日本のプロレタリア革命文学』

(13) 小林多喜二の『1927年3月15日』が訳され、書評で触れられている、しかしこれは発売禁止になる。『蟹工船』の訳の予報も出ている。

が、さらに1931年12月号に勝本清一郎の『満州における戦争と日本の作家』が出ている。この勝本の文章を皮切りに『リンクスクルヴェ』の関心の重点は次第に、文学より日支事変にかたむいてゆく。1931年9月満州事変、1932年1月上海事変、同年3月満州国成立という東アジアの動きは1932年の『リンクスクルヴェ』に大きな影響をなげかけている。しかし1932年3月号のハンス・ギュンターの『日支事変とインテリゲンチヤ』といい、1932年5月号の『ソ連作家から世界の作家へ』という呼びかけ文(L. ザイフリーナ, V I. リディン, ヴァレンチン・カタイエフ, L. レオーノフ)にしても、6月号のアンケート「戦争についての11の質問状」の8「日本軍のソ連国境への侵出に対してあなたはどのように態度をとりますか」が端的に示しているように、プロレタリアートの唯一の希望であるソ連に対する危機感、ソ連擁護が主調である。ソ連擁護の精神からのこの東アジアへの関心にくらべると、やがて共産党は勿論、ドイツをのみこんでしまうファシズムそのものに対する関心が激しく燃えあがるのは、遅きに失した感がする。勿論ファシズムに対する文章は、殊に、1931年9月の選挙以来散見するが、日支事変への関心にすっかり取って代るのは、ナチスと手を握ったシュトライヒャーが立てた、パーベン内閣が成立した1932年6月を反映した同年7月号からと言えよう。⁽¹⁴⁾「社会ファシズム論」が最後まで、統一戦線を妨げたと言うべきか。統一戦線は『リンクスクルヴェ』が廃刊になり、ナチスの支配が始まったときに始めて作家の組合組織である『ドイツ作家防衛同盟』S D Sの野党であるベルリン地区グループによって行われたが、勿論それは間もなく圧殺されてしまった。⁽¹⁵⁾

(14) 同号は巻頭にハンス・イエーガーの『仮面をはがれた20世紀の神話』、次いでアルフレド・クレルラの『イタリア・ファシズムのイデオロギー』、クルト・ケルステン『ファシズムの検閲』(パーベンの出版條令)、書評にマリオ・カルリの『ムッソリーニ的イタリア人』が取りあげられている。

(15) S D S及びその野党であるベルリン地区グループに関しては、“Aktionen Bekenntnisse Perspektiven”がその第4章を当てている。

『リンクスクルヴェ』がプロレタリア革命作家同盟の機関誌である以上、そこにはプロレタリア出身者と、インテリゲンチヤ出身者が共存している。

『リンクスクルヴェ』の文学問題はそこからおこってくる。そして、この問題はドイツのみならず、プロレタリア革命文学に共通の問題性を含んでいる。1925年の第10回党大会で党が企業細胞を基盤とするという組織がえの決議をして以来、とくに労働者が行う文学活動は、それぞれの企業内での新聞、雑誌の発行が盛んになった。それが労働者通信員活動である。1929年には、すでにベルリンだけで、ほぼ1200人の組織された通信員と、400の企業の報告を党の機関誌『ローテ・ファーネ』⁽¹⁶⁾は把握している。1929年発刊の『リンクスクルヴェ』は従って終始この労働者通信員活動を運動のための重要な要素として、これに紙面を提供しつづけている。通信員活動は運動のためだけではなくて、そこから労働者出身の作家が育つ、基盤としても重要性を帯びてくる。カール・グリュンベルク、クルト・クレーバー、ハンス・マルコヴィツァ、ヴィリ・ブレーデル、エミール・ギンケル、F. ゴチェなどは労働者出身者である。さらに、この労働者通信員活動とならんで、プロレタリアートによって行われたのはアジプロ劇団である。これもやがて職業的労働者劇団になるが、政治劇場をつくり出したエルヴィン・ピスカトールの演劇活動は、アジプロ劇団を背景としていると言えよう。一方知識階級出身者としてはヨハネス・ベッヒャー、K. A. ヴィットフォーゲル、ルードヴィッヒ・レン、エーリッヒ・ヴァイネルト、ジョルジ・ルカーチ等。通信員活動報告、労働者出身の作家の発表にまじって、まずK. A. ヴィットフォーゲルが、プロレタリア文学の理論を、1930年5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月号に『マルクス主義美学の問題』を連載した。ヴィットフォーゲルはここで、まずカントに発する美の自律性をフォルマリズムとして否定して、ヘーゲルの弁証法をもち出す。そして芸術以外の問題（政治、経済）を優先さ

(16) Fähnders/Karrenbrock/Rector (Hrsg.): Sammlung proletarisch-revolutionärer Erzählungen, Sammlung Leuchterhand 117, 1973. S. 241f.

せねばならなかったメーリングもまた、このカントのフォルマリズムに留まっていたことを指摘する。これは当時すでに始っていた新なるマルクス主義芸術理論を反映していたと言える。すなわち19世紀後半から、次第に支配的となってきた新カント派及び、自然科学（ダーウイニズム）の影響のもとで、マルクス主義美学を打立てようとしたフランツ・メーリングとプレハノフに対して、再び、マルクス、エンゲルスの思想的背景ヘーゲルに基く、弁証法（唯物弁証法）の確立がそれだ。ヴィットフォークはさらに、金利を追求する資本主義は本来芸術に対して敵対的であるという矛盾を指摘する。そして、その矛盾を解決しうるのはプロレタリアートであるとする。プロレタリアートには解かねばならない問題が山積しているかぎり、プロレタリアートの芸術は「傾向性」をもつ。しかし、ヴィットフォークはプロレタリア独裁間の芸術に関して、『プロレタリア文化とプロレタリア芸術』に代表される、トロッキーの否定的な立場を排して、レーニンの肯定的な立場を讃える。折しも五ヶ年計画を実現しつつある、英雄的建設を例証に出す。既に批判されているトロッキーは、同じく批判されたドイツのタールハイマーと組になって、この論文では、常に否定的に引き合いに出される。プロレタリア芸術はフォルマリズムでも、中間的立場でもなく、唯物弁証法的形成でなければならない。それは、生と資料と形成の統一であって、特に資料（Stoff）に重点をおく。／ヴィットフォークの文学理論を打出す前にすでに、1929年5号（12月）のカール・グリュンベルクの『文学批評家としての企業労働者』に対する、1930年1月号のオスカル・マリア・グラーフの『一人及び多くの同志への答え』が、これをたしなめる編集部短い批評づきで出ている。「グラーフが、書物は階級闘争の武器でなければならないと言うなら、われわれは同意しよう。だが、かれが書物は著者の非文学的意図で書かれて、もはや文学ではなくて、モーゼル銃そのものと見なされねばならないと言うのなら、それは再び、売文業（Literatentam）に墮することであろう。」これは謂わば口火である。以下この問題は『リンクスルヴェ』の最終刊まで続く。1930年

2月号の労働者通信員のことを書いたエリッヒ・シュテフェンの『プロレタリア文学の原細胞』という文章に対して、同年3月号にN. クラウスは『文学問題における経済主義に反対する』で批判している。批判はこうだ。まず、企業職場の闘争はそれ自身で終始するのではなくて、マルクス主義の立場から、社会秩序の全体のなかで捉えなくてはならない、したがって職場の細胞新聞即プロレタリア文学であるとすれば、そこには「プロレタリアートへの軽蔑がひそんでいる、というのはプロレタリアートはブルジョアジーがその革命的高揚期に創ったと同様の、いなそれ以上の偉大な芸術作品を創ることができないと信じているからだ」。この批判文が載った同号のマクシム・ヴァレンチンの、アジプロ劇団をあつかった『赤いメガフォン』に対して、4月号に同じくヴァレンチンの『アジプロ劇と闘争価値』が、両者を含めた編集部の批判『ヴァレンチンへの回答』とあわせて戴せられている。⁴⁷批判はこうである。ヴァレンティンは闘争価値と芸術価値とを対立させ、前者をとる。それなら舞台に機関銃をおいたらいい。せいぜいアジピラを読んだらいい。メーリング伝来の「芸術はいらない、ただ傾向性（闘争価値）だけだ」になる。

簡単に述べただけだが、この二つの批判文のなかに、やがてジョルジ・ルカーチによって精密に展開される批判の萌芽のすべてはある。ジョルジ・ルカーチはすでに1915年に『小説の理論』によって、かれ独自の文学理論を歴史哲学的に展開していた。さらに1923年には『歴史と階級意識』によって、メーリングやプレハーノフを悩ました「自然」を「歴史」からきっぱり排除し、カントに対して、ヘーゲル＝マルクスに基いた史的弁証法を展開していた。亡命先のモスクワの『マルクス・レーニン研究所』で、かれは自分の独自の理論を、エンゲルスのバルザックに関する見解によって、公認のものにしていた。かれがモスクワから到着したベルリン、しかもその仕事場『リ

(17) 原文とそれに対する批判文をあわせて出すこの形式は、私にはカール・クラウスのやり方を思いおこさせる。

リンクスルヴェ』は1930年11月のハリコフ会議の決議によって、大きく変わろうとしていた。それは既に述べたように、1931年の10月号のベッヒャーの巻頭論文『われわれの転換—プロレタリア革命文学の存在の闘争から拡大の闘争へ』によって新しい進路をとろうとしていた。この転換は、既に述べたように、ドイツのプロレタリア革命文学が、もり上った大衆の運動にこたえていないということだ。そしてそれは「文学的芸術作品の読者を生み出す比較的小さな部分と、芸術から遠く離れた、価値のない作品の買手であるあの大衆とに文学社会が分裂しているところに根⁽¹⁸⁾」をもっている。『リンクスルヴェ』はしばしば、文学消費者の文芸社会学的な調査を出している。例えば1931年8月号のフリッツ・エルペンベックの『文学的兵士軍』がそれだ。そこでは、大衆はウルシュタイン系の小説(『リンクスルヴェ』が、常に眼のかたきにしてきたブルジョア資本の出版社)に取られていることが、鋭く指摘されている。今や質を深めつつ、大衆を捉えるプロレタリア文学が求められる。1930年のヴィットフォーゲルの文学理論の展開は、それ自身新しい方向を含みながら、理論展開に終わった。シュテフェンやヴァレンティンへの批判はそれと別に行われていた。理論展開と実作批判とは触れあうことなく、謂わば並列的に雑誌のなかで行われていた。今ハリコフ会議の決議、『われわれの転換』のなかにある『リンクスルヴェ』は、ルカーチという謂わばモスクウお墨つきの優れた批評家をむかえる。1931年11月号にルカーチのヴィリ・ブレードルの小説『機械工場N&K』、『ローゼンホーク通り』に対する批判文が出る。ルカーチは前者は全体のプロセスの一部にすぎず、後者は前者より拡大されているが一つのシェーマにすぎないとする。その欠陥は「すべての本質的なものをつつむ、幅ひろい叙事的なその筋の棒と、時に一種のルポルタージュになり、時に集会報告になるその語り口との間の芸術的に解かれていない矛盾」、そこから人物の性格が硬化する。言語はメガホン調、書く技

(18) Aktionen Bekenntnisse Perspektiven. S. 203.

術の欠陥、そのような形式は内容と関聯する、人物形成は従って技術の問題でなく、弁証法操作の問題。弁証法の欠陥は内容に及ぶ。すなわち革命の困難を消し去る、困難の形式をなおざりにする、結果のみを示して、困難をともなったプロセスを描かない、つまり技術の欠除でなくて、弁証法の欠除。／1932年1月号にブレードルの自己批判の文章『一步前進』がでる。／同年4月号に『ヴィリ・ブレードルの小説について』という題のもとにオットー・ゴチェのルカーチ批判『他の人たちの批判—われわれの文学の資格の問題についての若干の註釈』とルカーチのそれに対する反論『文学における自然発生理論に対する反論』がならんで出る。ゴチェは大衆の批判は、ルカーチのむつかしい理論より、ブレードルの小説を受け入れると反論している。それに対してルカーチは大衆批判はローザ・ルクセンブルクの残存物である自然発生性であって、むしろレーニンのように大衆の文学的教育をすべきであるとする。芸術的形成と階級闘争は対立するものではない、対立するものから形成 (Gestaltung) のかわりに、ルポルタージュや集会報告でおぎなうことになるのだ。／ルカーチはさらに同年6月号に『傾向性か党派性か』を書いている。ここでは純粹芸術 (形式) と傾向性 (内容) の分離が、傾向性→アジテーション→機械的唯物論となること、この二元論はカントの形式主義からまぬがれなかったメーリングの観念的折衷主義をまねいた。すなわち芸術と倫理 (ゾルレン—永遠) の分離が本質的となる。ここにトロッキズムの萌芽がある。すなわち階級闘争 (傾向性) と社会主義 (純粹芸術) の分離がある。バルザックのようにその傾向性 (理想) にもかかわらずの形成、芸術と倫理 (傾向性) とは形成によって止揚されている。プロレタリアートは「にもかかわらず」はもはやないのだから、傾向性 (願い) という言葉を棄てて、党派性 (形成) という言葉を用いて、文学の階級闘争における遅れをとりもどすべきだ。／私たちは1932年の3月号の『理論的学習のための書物』という文章のなかにも「党派性とは客観性ということだ」という言葉を見出す。ソ連において党が文学をその手に掌握しようとしてつづいた時期である

ことを思わないわけにはゆかない。／1932年7月号,8月号とつづけてルカーチは「オットヴァルトの小説についての批評的註釈」という副題のもとに『ルポルタージュか形成か』を連載する。エルンスト・オットヴァルトの司法をあつかった小説『なぜならかれらはかれらのすることを知っているからだ』を機縁としたこの文章において、ルカーチは既に述べたことをさらに詳細にくりかえす。ルポルタージュは流行である。アプトン・シンクレアもトレティヤコフもエーレンブルクまでこれを使っている。しかしその起源はブルジョア文学のある段階、すなわち心理小説への反動として生れた。しかしその反動は心理小説の理解がなかったから単に形式的なものにすぎない。心理小説は資本主義の分業からおこったのだ。物質的生産が作家には異質のものとなったので、精神生活にこもる。これは純粹芸術（形式）と傾向性（内容）の分離である。心理小説の反動がルポルタージュ、現実暴露、傾向性、作中人物の二義化。この機械的な対立に対するのが弁証法。ルポルタージュにも新しい可能性はあるが、原理的には形成的文学と違う。ルポルタージュは理性的で科学的、従って科学と芸術、理性と感情を対立さす。ルポルタージュは例証的であるが、典型的ではない。その点でも形成された典型、文学的典型とは違う。原理的に違うルポルタージュが文学の創造的方法を主張するのは間違い。ルポルタージュは全体過程が捉えられない段階で発生する。ブルジョア文学には全体過程はもはや捉えられない。プロレタリア文学はまだそれが出来ていない。だが全体過程を形成（小説）することだけが資本主義の経済的社会的形式のフェチズムを解消するのだ。／1932年10月号にオットヴァルトは『〈事実小説〉と形式実験—ジョルジ・ルカーチへの反論』を書く。オットヴァルトの反論はこうだ。ルカーチは文学作品の抽象的哲学的分析ばかりやるが、大切なのは文学作品の現実への働きかけ（機能）だ。アプトン・シンクレア、トレティヤコフ、エーレンブルクもその点で成功している。トレティヤコフがソ連で非難されたからと言ってわれわれがそれを鵜呑みにする必要はない。ソ連の文化遺産の問題でもむしろわれわれにとっては反動的

だ。ルポルタージュは階級闘争の要求から生れたのだ。文学・美学的現実ではなくて、現実が大切。階級闘争は文学的形成より事実を求めている。文学と科学の対立と言うが、科学は文学を変革する。イプセンの『幽霊』はダーウニズムを前提とする。ルポルタージュは在来の小説形式を爆破する。在来の小説形式ではソ連の五ヶ年計画は描けない。ベッヒャーの『大計画』もトレティヤコフの『将軍たち』も形式実験ではないか。全体性の問題は19世紀の作家は安定した全体のなかにあったが、現代のわれわれは流れのなかにある。現代ルカーチが言うような作家がいたら見せてもらいたい。／この反論に対してルカーチは最終号である11・12合併号で『災を転じて福となす』という文章で応答する。ルカーチはここでオットヴァルトはその反論でかれの創作方法のイデオロギーの下部構造をさらしたのだから、これを批判しようと言っている。つまりオットヴァルトは創作方法と経済的現実を切り離し、批判はひたすらこの切り離された経済的現実に向けられるべきだとし、従って文学はこの直接的にアクチュアルな現実に働きかけるアジテーションの機能のみをもつとする。しかしマルクス、エンゲルス、レーニン¹⁹は働きかけそのものより、働きかけの原因である創作方法に重点をおいている。働きかけを問題にする「実際主義」より、今日の階級闘争はもっと高度の文学を要求している。偉大なプロレタリア芸術を。ルカーチはここでブレヒトの演劇的劇場（古い劇場）と叙事的劇場（新しい劇場）のラディカルな分離を引き合いに出して、芸術享受をきびしく拒否するブレヒトやオットヴァルトやアプトン・シンクレアの「ラディカルな新しい芸術」に対して、マルクス、エンゲルス、レーニンを対比させている。それはつまり市民階級の歴史の無視であり、階級が変化してゆく流れを見ないで、ただ対立で見るのは観念的だとする。これは文化遺産の問題についても言えることで、ブルジョアジーとプロ

(19) ブレヒトに関しては1931年1月号にO. ビーハによる『處置』(Maßnahme)のベルリンにおける初演が好意的に述べられているが、党の複雑で多面的な闘争と体験認識に対するその抽象性が批判されている。

レタリアートを対立で見ないで、ブルジョアジーをプロレタリアートのなかに転倒させ、止揚することこそ弁証法である。プロレタリアートが権力を奪取するまで文化遺産を断念するのはトロキズムであり、無から創造しようとするのはプロレトクルトであって、いずれも克服された反形成理論である。ブルジョアからの遺産は予想以上に大きい。「この遺産の解明のためには、最近の50年—60年の文学、文学理論、哲学の根本的なマルクス主義的研究が必要であろうが、今日はまだそれに対する予備作業すら始められていない。」遺産すべきは勃興期の健全なブルジョア文学で、下降期のデカダンなブルジョア文学は表現主義、新即物主義等紆余曲折して反形成理論をかたちづくる。

シュテフェン、ヴァレンチン、さらにブレデル、オットヴァルトに対する『リンクスクルヴェ』の編集部（後半はルカーチによって代表される）の批判を長々と述べたが、その対立の基調は終始変らないものがある。ルカーチがかかげた題「ルポルタージョか形成か」によって大体それは言いあらわされているのではないか。そしてこのルポルターージュは『リンクスクルヴェ』が終始支持した労働者通信員運動の方法である。ただ編集部並びにルカーチが批判したのは、ルポルターージュが原理的に文学（形成）ではないということである。この方法への批判は、労働者出身の作家の作品に向けられた。しかしオットヴァルトへの批判にも見られるようにその批判はアプトン・シンクレア、トレティヤコフ、エーレンブルク、さらにはブレヒトに及んでいる。アジプロ劇団を背景とした「事実」の政治劇場を展開したピスカートルに対する批判²⁰と根を等しくしている。批判は労働者出身の作家の方法とともに、ルカーチの謂う「ラディカルな新しい芸術」をもろ刺しにしている。ダダに発してヨーロッパを席卷したアヴァンギャルド運動、ドイツにおけるそのあらわれである表現主義、ヘルヴェルト・ヴァルデンとその雑誌『シュトルム』、

20) 1930年12月号の『政治劇場の突破』でピスカートルは「私はこの雑誌でしばしば攻撃されてきた」と述べている。攻撃の例は1929年2号(9月)の無署名の『ピスカートル劇場』、1930年1月号のベルタ・ラスクのピスカートルの『政治劇場』の書評等。

文学運動に留まる表現主義に対して、政治的な左翼表現主義は雑誌『デイ・アクション』、『ダス・ツィール』、『ディー・ヴァイセン・ブレッター』に代表される。『リンクスクルヴェ』の知識階級出身者は多かれ少かれこの影響を受けていると言えよう。この間の事情を述べた池田浩士氏の看察に共鳴するので少々長いが引用させてもらう、「…『プロレタリアートの文化解放』とは『単に旧世界の豊富な文化との繋がりをすべて断ち切ってしまうものではない』、むしろ『プロレタリアートこそ、旧世界が達成した一切の精神のおよび物質的価値の正当な継承者なのである』(1918) と強調するボグダーノフではなく、『人間を社会的に組織するための武器』として芸術をとらえ、『プロレタリアートが社会的な仕事、闘争、建設の場でその力を組織化するためには、プロレタリアート自身の階級芸術を持つ必要がある』…」と述べて、『集団主義的な芸術』を要求するボグダーノフの側面が、ドイツのプロレタリア文化運動の担い手たちのボグダーノフ像だった、と言えなくはない。G. G. L. によって『芸術破壊ヴァンドリズム』²¹⁾であると非難された思潮も、遺産を破壊的に改竄しつつ集団的な演劇活動を試みたピスカトールらの実践も、その当事者たちの主観はどうあれ、ロシアの〈プロレトクルト〉の理念よりは、むしろ、マヤコーフスキーのあの煽動的な詩に表現された左翼未来派の姿勢を、²²⁾「…資本主義は〈相対的安定期〉にはいったというコミンテルン第三回の確認にもとずきながら、1922年夏の第一回教育指導員全国会議を出発点として独自の文化運動を模索しはじめたとき、かつてドイツ革命のなかで左翼表現主義者たちや〈プロレトクルト〉派が提起したプロレタリア文化の理念が、みずから現実に解決すべき課題としてあらためて行く手に立ちはだらざるを

21) 1920年にジョン・ハートフィールドとゲオルゲ・グロスによる「芸術やくぎ」(Der Kunstlu-mp) に対して、当時KDDの機関誌Die Rote Fahneの文芸欄をうけもっていたG. G. L.の批判

22) 池田浩士『ドイツ・プロレタリア文学運動の再検討のために(下)』,岩波書店『文学』Vol. 41. 1973, 92-93頁。

えなかつたのである。ソ連で〈プロレトクリト〉批判の決着がつこうとしていたまさにその時期に、KPDは初めてこの運動にとりくむことになる。G. G. L.によって非難された『芸術アナーキズム』は、そこにいたるまでのドイツの革命的な文化・芸術運動の唯一の…担い手だったばかりでなく、あとにくるものに問題を課したという意味においても、実質的な先蹤者だったのだ⁽²³⁾。勿論これは『リンクスルヴェ』以前のことが述べられているわけであるが、『リンクスルヴェ』が「ラディカルな新しい芸術」と労働者作家によるプロレトクリトをもろ刺しに批判している点に、池田氏の指摘している「あとにくるもの」に「課された問題」であると言えよう。そしてこの批判の原理は『リンクスルヴェ』の廃刊とともに、モスクワに合流して、1934年7月の最終決定に参加する。(外国学総合研究“現代と国際環境”の一環として書かれた)

(23) 同書、93頁。